子どもと(8)

十一月・ひなた

清水　光子

「お宅のお孫さん、幼稚園おきまりになった?」「ええ、〇〇学園よ」「よかったわね。あそこは有名小学校の入学準備をしてくれるって評判ですものね」「そうらしいの。だから息子夫婦大喜びしてるわ」「うちは上の男の子もそうだったので近所のA園なの。あそこも躾をきびしくしてくださるし、字なんかよく教えてくださるから、やんちゃな下の子に向いてると思うのよ。それに私、あそこの制服、とても可愛いので気に入ってるのよ。」お祖母ちゃん連のこんな会話をきいたのは十年程前の十一月であった。今、親達、若いお母さん達はもっと切実な幼稚園選びをしているのではないかしら、と想像している。いろいろな面で迷っている若い親達が都会地に限らず多いようである。

倉橋惣三先生は、『育ての心』の中で、「教育的な、余りに教育的なおっかさん」という題で書いておられる。「非教育的ではいけないというと、こんどはやたらむしょうに教育的になり過ぎたりする。…中略…親子とは天地自然の関係である。その自然の関係から親ごころというものがどの親にも自然にある。それを学者は母性といったり、愛育本能といったりする。ともかくも強い強い親ごころ

である。親が、子にとって必要なのも大事なのも、この自然の親ごころを子どもに対してもって呉れるものは、その親の他にないからである。そして、親がわが子を愛育してゆくことも、先ず以てそこから始まるのである。」とあって、多少の失敗はあっても親の親たるところがあり、親の真の態度もきまるのであるが、ところが「あまりに教育的に神経質になったり、理屈づめになったり、科学的になったりさせられると、折角の親ごころの自然よりも、教育的という意識や技巧が打ち勝ってしまって、親が教育的になったのか、教育的というものが親の位置に座っているのか分からなくなる。その顔まで母の自然の顔でなくなって教育面になったりする。」と、つづけて「今日の社会には殊にいわゆるインテリ社会には、そういう親のお母さんが多くある。もちろんその人に親ごころがないではない。もとはといえば我が子可愛い親ごころから一切が出発しているのではあるが、それが理論で圧され、学問でかためられ、形にはめられ、方法の末に走り、まるで機械仕掛けの母人形……。」これがもう数十年前の様相なのだ！　今はもっともっと激しく複雑な教育面のお母さんが多いのではないか！　子ども達はもっともっとあたり前のお母さんを欲しがっているのではないだろうか。〃そうすると、こうなるからやめなさい。〃〃それはきまりだから〃〃約束したでしょ？〃その上時間、時間で行動を区切られては子どもはたまったものではない。ルーズがよいのでは決してない。人間らしく〃そんなことしたらお母さんとても悲しい〃〃いいことしたのね。うれしいね〃と子どもと一しょに喜び悲しみ、楽しみ怒る。そんな親子関係を取り戻したいと切に思う。

幼稚園選びのことから外れてしまったので話を戻そう。子どもにとって嬉しい、楽しい園とはどんな園か、すてきな制服でもないだろうし、きちんと整った、色彩豊かな？　外壁でもあるまい。活気

に満ちた、温かい雰囲気。前のお茶の水附属幼稚園長外山滋比古先生はそれを〝園風〟と言われたが、そのような空気が子どもを育てるのだと思う。あしたもここへ来て遊びたい！　と子ども達が心底思うような園を親は選ぶのが当然であるし、保育者はそのような園風をつくるようにしたいものだと思う。

それにしてもどうして十一月に入園をきめるのだろうか。私はかねがね疑問に思いながらも意気地なく流されてきてしまったのだけれど、通園の始めは四月なので満四か月は宙ぶらりん。入園面接のときはまだ三歳何か月で、やっとおむつが取れるかどうかという三歳児は殊にこの四か月にめざましい成長がある筈。しかしそれは四月入園の段階でしっかり受け入れればよいとして、面接に行って○○幼稚園に行くことに決まったのに「いついくの。僕、早くいきたいな」ときいても、「おりこうにしないとだめなのよ」「お正月がきて、お雛様がすんでからよ」などと言われても子ども心は納得できるだろうか。折角の期待がしぼんでしまって、お預けをくったような裏切られたような思いはないだろうか。そして、四月が近づくと幼稚園に行くのだから、といっていろいろ制約が出てきたりするのでは？

また、サラリーマンの家庭では突然転勤が言い渡されるのも三月である。そんなこんなを子どもの側から考えると、この辺で原点に戻ってみてはどうかしら？　と無位無官の老婆は考えるのである。

東日本の十一月はうららかな、小春日和の日が多い。十月の空より一層あおく澄んだ空が都会でも仰げる日がある。日足は短くなっても午前中から二時頃までのやさしい日射しは、倉橋惣三先生の「ひなた」の文章そのものである。

〝ひなた。―そこは庭でも廊下でも、なんと、なごやかに人を魅きつけることか。
ひなた。―それは子どもでも大人でも、なんと、うっとりと人を睦ませることか。
ひなたには陰がない。冷たさがない。明るく、暖かく、人の心を解き又溶く。自分への不用意、人への親しみ。眠りもせず、醒め過ぎもせず。離れもせず。抱きしめもせず。ただ、おっとりと、われもなく他もない。
胸をあけて、肩を寄せて、足をなげ出して、手を組んで、のんびりと打ち集うひなた――

教育のひなた。ひなたの教育。〟

保育室のテラスのひなたで絵本を読んでもらっている子ども達
あやとりをしているA子とY子
「白くなったのは取ってもいいのね」とじゅず玉をつみ取っては小箱に入れているRくんとSちゃん
男の子が五人、さっきから殆ど黙々と山を作っている日の当たった砂場
そのどれもがしずかで明るい日なたの絵である。一瞬そこだけが時の流れからぬけ出したような、何かが凝縮してきらめくような、十一月の日なたである。

彼一語　我一語秋　深みかも　　高浜虚子

子ども同士にこんな姿をみたりする。

深まる秋の中で、生きものはエネルギーを一ぱい貯めこんで、じっくりと熟成を待っている。甲州のワイナリーを訪ねた日の感動と重なって脳裡に浮かぶ像はそれなのである。

明治神宮の表参道沿いに住んでいた半世紀前には、十一月三日になると並木の銀杏の殆どが黄金色になるのであった。都市の気温が高くなったらしいこの節でも代々木公園の銀杏の林は、十一月の園外保育の子ども達を黄金色のじゅうたんを敷いて迎えてくれる。それに紅葉の林はけんらん豪華な錦織で。いつか掃除をしている婦人が〝掃くのも惜しいようね〟とつぶやいていた。

喜べば　しきりに落つる　木の実かな　　富安風生

椎の実、なら、くぬぎの実を拾って余念のない林の道である。

明治神宮にこだわるようだけれど、何年か前、鳥がねぐらへ帰る様子を見たいと神宮の森に夕方保育をした。林の中に射し込む夕日の光の縞模様の美しさに感動しながら草地へ出てふりかえると、高い木々の巣へ鳥が鳴き交わしながら帰っていくのを子どもたちと見ていた。それだけのことだったけれど私は子ども達が何かを感じたものと今以て信じている。茜色に染まった空は見るまに紺青になっていって、宵の明星が輝きだす。茜色の雲を四歳児T君は〝熱そうな雲〟と表現したのも忘れられな

い。〝偉いなるものの前にいる小さきものの心を寸差を捨てた虔しさに感じさせられた（倉橋惣三先生「育ての心」より）〟一時であった。

「ゆったり、たっぷり、きっちりと」とこの一月に亡くなられた宇野重吉氏が演技のことで言われたことばを、十一月のひなたに思うのである。そして月末には

神無月　降りみ降らずみ　定めなき　時雨ぞ冬の　はじめなりける　　後撰集　よみ人知らず

子どもとともに暖かい楽しい冬を、と思う。

（音羽幼稚園）